

2011年 8月16日・「茨城新聞」では

「命が危ない 311人集」に収録

取手の坂木さん2篇好評

震災と生老病死を表現

昨年、第二詩集「筑波山」を発刊した、取手市新町の坂木玄理さん（70）の新作2篇が、「命が危ない 311人詩集 いま共にふみだすために」（コールサック社刊）に収められ、話題となっている。

坂木さんは、県詩人協会、茨城文芸協会会員で、「衣」同人。「命が危ない」詩集は、「さまざまな様相に現れた命の危機をとらえ、東日本大震災、原発事故の事態も受けて」（編者の佐相憲一氏らの編註）出版された。参加した全国の詩人は、詩誌「コールサック」などでの公募に応じた311人。作品は延べ379篇に上る。

坂木さんは、酒木裕次郎のペンネームで「東日本大震災」と「生老病死」を発表している。被災地の惨状を「なぜ。なぜ。なぜだ。福島南相馬。いわき。茨城大洗。水戸。森進一の演歌に唄われる港町が、いま恨み節の地獄にさらされている」（東日本大震災）と表現。「生も歓喜、死も歓喜という。心が永遠に続いていくものならば、老いた肉体に別れを告げて、新しい肉体で生まれてくる。それが生きとし生きるものの定めなのか」（生老病死）と命に向き合う心構えを記した。

作家でクレヨンハウス主宰の落合恵子さんが帯文を寄せた同詩集は、定価2000円（税別）。（荒井俊夫）

と紹介されています。